

日本語初級教材のイラストに見られる「視点」の分析

横 田 隆 志 *

The analysis of “the viewpoint”
in the illustration of the Japanese beginner’s class teaching materials

Takashi Yokota *

Received November 7, 2008

Abstract

This study is aimed at analysing the “speaker’s viewpoint” as seen in illustrations used in Japanese beginner’s class teaching materials.

Many illustrations are used not only in Japanese teaching materials but also other language materials. It is because they help the learner to understand new sentence patterns as well as to make new sentences. However, it has not been proved whether the viewpoints presented within the illustrations of textbooks are the same as that of the viewpoint used in the Japanese language.

Various Japanese expressions can be used by the viewpoint of the speaker according to the viewpoint of the speaker in context of the situation as well as the circumstances. Analysing the viewpoint of the narrator is vital and an important problem in understanding Japanese.

The Japanese language is a highly arbitrary language and the viewpoint within the Japanese language can be acquired in relation to one’s viewpoint. Hence, it is essential for the Japanese learner to be aware of the Japanese viewpoint in various situations. But it can be seen that not enough material is presented in teaching materials for beginners to learn about the various viewpoints. Therefore, I have analysed whether differences in viewpoints are adequately presented in the illustrations as used in the teaching materials for beginner learners.

キーワード

初級教科書, 視点, 視座, イラスト, 日本語の視点

* 国際交流センター
International Exchange Center

1. はじめに

日本語教育の初級教材では、イラストが使われているものが多い。これは、言語教育での視覚教材は見ることによって言語習得の過程に結び付き、教育・学習が豊かで確実なものになるからである。(日本語教育学会(編) 1990) また、絵教材は代入練習や転換練習など、パターンプラクティスでのキューとして役に立つからである。(川口・横溝 2005)

しかし、守屋(2007)が述べているように、日本語の教科書で使用されているイラストは視点人物である話者が一見して特定できないものが多い。確かに日本語の教科書のイラストは新規の文型導入の際や文型練習をする際に、学習を助けるために必要であるが、イラストの視点人物が特定できなかったり、特定するのが難しかったりすると学習者は日本語の視点の習得が十分にできない。日本語の文法については、森田(2002)は、表現者の視点が、叙述内容における人物の視点や生起する事柄とどう関係していくか、その対応関係によって、日本語のさまざまな表現が使い分けられているため、日本語の理解には特に表現者の視点の分析が欠かせない重要な問題であると述べている。日本語の文法の習得には、日本語の視点の習得が不可欠である。しかし、日本語学習の初期においては、基本的な文型の導入が中心となり、この日本語の視点を考慮した教材は少ないように思われる。

そこで、本研究では、日本語の視点とはどんなものなのかを定義し、初級教科書で使用されているイラストは実際に日本語母語話者の日本語の視点と同じものであるのか、また教材でその視点が統一されているのかを分析する。

2. 先行研究

日本語の視点の研究では、森田(1998)や金谷(2004)などがある。森田は日本語の発想と英語の発想を比較し、日本語の発想は蛇のように前へ進みながら進行方向を適宜変えていくことが許される恣意性の高い言語であるとしている。これは、日本語の視点が己の視点を通して物事を捉えているからであり、この視点は、固定的ではなく時間や状況によって移動が可能で蛇が地上を這っているような視点なので、「蛇の視点」と呼んでいる。一方、英語の視点は、物事を空から眺めるように傍観的に捉えるものであり、鳥が空高くから見下ろしているような「鳥瞰図」のようなものなので、「鳥の視点」と述べている。また、金谷も日本語の視点を英語の視点と比較し、英語の視点、日本語の視点をそれぞれ「神の視点」、「虫の視点」として各言語の視点について述べている。「神の視点」とは言語化される状況を遠くから見る視点であり、森田の「鳥の視点」と同じものである。また、「虫の視点」は言語化されようとする状況の中に視点がある、森田の「蛇の視点」と同じ視点である。(図1)

また、文法的には、日本語ではある行為を表す際に話者が関与する場合は一般に話者を主語にして文が作られる。(久野 1978) しかし、一般的には日本語の会話では「私」のことを表現する際に「私」が表出することは少ない。(横田 2006, 2007) それは、日本語の特色として、主語に「私」を顕在化させ、他人と区別した「私」を客観的に意識させすることはなくとも、それは「私」が空洞化していることを意味するのではなく、「私」と言わない時でも、そこに「私」が存在しているからである。つまり、ある行為を表現しようとする際に話者である

「私」が関与する場合に「私」が主語となるが、主語としての「私」を出現させることなく「私」自身のこと、考え、感情などを表すことができるのである。(宇津木 2005)

つまり、日本語の視点とは、視点人物が「私」であるときには視点人物が「私」であり、視座¹⁾が「私」自身の内から見ている風景となり、森田の「蛇の視点」や金谷の「虫の視点」のようなものになる。そのため、「蛇の視点」・「虫の視点」では、自分自身が見えることはなく自分自身の目で見ているものが視点となる。

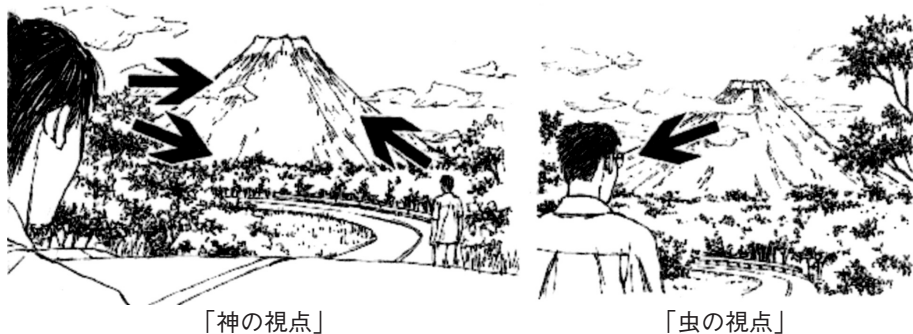


図 1

金谷 (2004)

3. 教科書分析

3-1. 分析方法

教科書の会話練習にあるイラストではどのような視点が用いられて描かれているのかを三つの点から分析する。一つは、初級の教科書内にどのくらいの割合で、「虫の視点」・「蛇の視点」から描かれているイラストであるかを調査する。これは、日本語の視点である視点人物が「私」である場合に視座が一人称の内の視点から言語化されている「虫の視点」・「蛇の視点」である。そして、もう一つの視点の森田、金谷が英語の視点であると述べている「神の視点」・「鳥の視点」のイラストがどのくらいあるのかを調査する。これは、「私」を客観化した「私」が空の上から見下ろして、視点人物がイラストの中にも表れている視点のことである。また、同じ練習問題²⁾のイラストの中に「虫の視点」・「蛇の視点」からのイラストと「神の視点」・「鳥の視点」の2種類の視点が混在しているものがあるかどうかを調査する。更に日本語の視点でない「神の視点」・「鳥の視点」が使われているイラストがある場合は、どのような文型の導入で使われやすいかという傾向を探る。

3-2. 対象教材

日本語の初級教材の中から以下の2種類の教科書を選んだ。本研究でこれらの教科書を選んだ理由は次のとおりである。1 比較的イラストが多いこと 2 ドリル形式であること 3 学習者が視点人物である会話練習であるという3点である³⁾。

これは教科書の中のイラストがある文法事項のみに使用されている場合だとある特定の文型で使用されやすい視点が存在するか、またある文型では使用されにくい視点が存在するかを分析しにくいからである。また、教科書の練習問題等で文法事項の定着を図るための練習問題にイラストが描かれており、そのイラストを手がかりに発話、または文を作るような教科書を選択した。これは、学習者がイラストの視点をもとに文を作るために視点の分析がしやすいからである。初級での学習事項は目標言語の文化圏で生活をしていくために必要な具体的な会話のやり取りのため、発話人物が学習者自身である文型が多く、表1のとおり「みんなの日本語」、「はじめよう日本語」とも1, 2の2冊から成り立っている初級の教材である。

表1

	教材名	発行年	発行	ページ数
1	みんなの日本語 初級Ⅰ本冊	1998	スリーエーネットワーク	244
	みんなの日本語 初級Ⅱ本冊	1998	スリーエーネットワーク	247
2	はじめよう日本語初級1ドリルと文法	2006	スリーエーネットワーク	145
	はじめよう日本語初級2ドリルと文法	2006	スリーエーネットワーク	141

4. 結果と考察

4-1. イラストに見られる視点

調査の結果、次の3点について明らかになった。一つ目は、教科書に使われている「視点」は統一されていないということである。二つ目は、同じ問題の中にも「視点」が「蛇の視点」・「虫の視点」と「神の視点」・「鳥の視点」の2種類が混在しているイラストがかなり存在するということである。三つ目は、受身、使役、やりもらいなどのイラストは「神の視点」・「鳥の視点」で書かれているものが多いことである。

4-2. 「視点」の統一

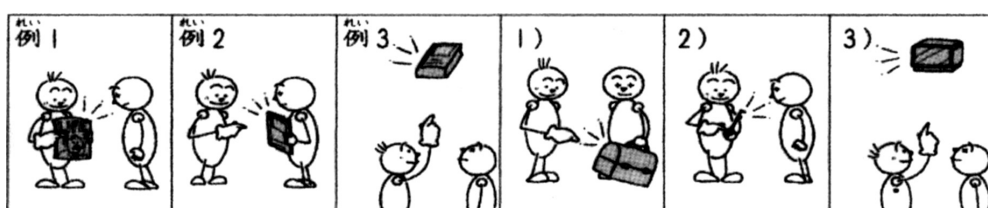
「みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ」では、総イラスト数が483だった。その中の「蛇の視点」・「虫の視点」から描かれたイラストは229あり、「鳥の視点」・「神の視点」からのイラスト数は254であり、「鳥の視点」・「神の視点」からのイラストがわずかながら「蛇の視点」・「虫の視点」より多かった。「はじめよう日本語初級Ⅰ・Ⅱ」でも、「みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ」と同様に総イラスト数537のうち「蛇の視点」・「虫の視点」から描かれたイラスト207、「鳥の視点」・「神の視点」から描かれたイラストが330と「鳥の視点」・「虫の視点」の方が多かった。(表2)

実際の日本語の視点は「蛇の視点」・「虫の視点」にも関わらず、「鳥の視点」・「神の視点」からのイラストの方が多く、また、どちらかの視点に偏ってイラストが使われているわけではなく、それぞれの教科書で約半分ずつ「蛇の視点」・「虫の視点」と「鳥の視点」・「神の視点」からのイラストが使用されていることが明らかになった。つまり、教科書として学習者が視点人物の場合でも視座がきちんと特定されているわけではなく、「蛇の視点」・「虫の視点」や

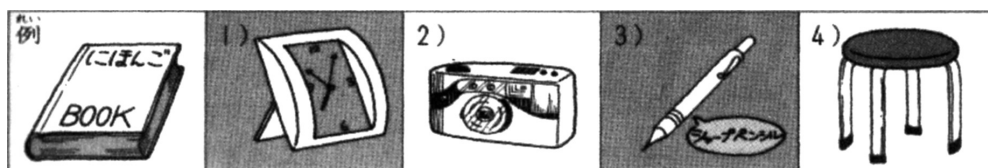
「鳥の視点」・「神の視点」が一冊の教科書の中に存在している。また、その視点からのイラストから学習者は発話・作文をするために違った視点のものも同じ視点であると誤って理解している場合があるように思われる。

表 2

	イラスト数	蛇の視点・虫の視点	鳥の視点・神の視点
みんなの日本語 初級Ⅰ	341	161	180
みんなの日本語 初級Ⅱ	142	68	74
はじめよう日本語初級Ⅰ	261	106	155
はじめよう日本語初級Ⅱ	276	101	175



「鳥の視点・神の視点」



「蛇の視点・虫の視点」

図 2

「みんなの日本語」

4-3. 「視座」の混在

各教材での文法事項の特色や導入のしやすさなどから各課ごとの視点の相違は教えやすさからの観点から考慮すれば問題はないように思われる。しかし、同じ練習問題⁴⁾で「蛇の視点」・「虫の視点」, 「鳥の視点」・「神の視点」がイラストで使われている場合がある。「みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ」では練習問題の数が全部で107あり、その中の19の問題でイラストの視点が、「蛇の視点」・「虫の視点」, 「鳥の視点」・「神の視点」の2つの視点が混在しているものがあった。また、「はじめよう日本語初級Ⅰ・Ⅱ」でも、154の問題数のうち19の問題が2種類の視点が混在していることが分かった。(図3)

この視点の混合は、特に学習者が理解しやすいように配慮されたものや何らかの意図が存在しているようには感じられない。

表 3

	練習問題数	2種類の視点が混在している数
みんなの日本語 初級 I	78	8
みんなの日本語 初級 II	29	11
はじめよう日本語初級 I	77	10
はじめよう日本語初級 II	77	9

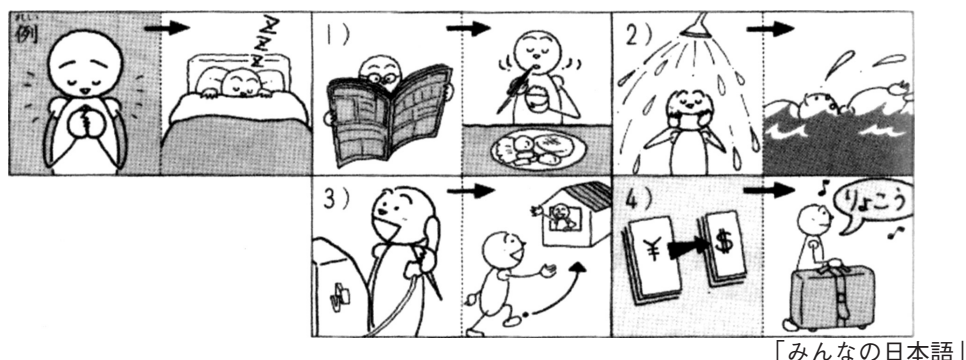
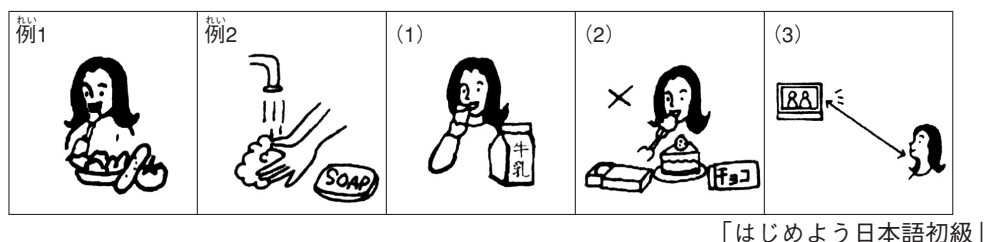


図 3

4-4. 「受身、使役、やりもらい」などの視点

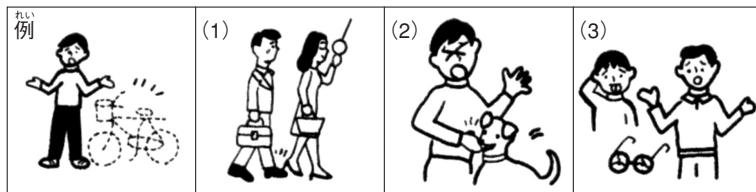
図4のように受身、使役、やりもらいなどは物や事柄の移動や人間関係が関わってくるために「鳥の視点」・「神の視点」でのイラストが多い。しかし、視点人物が学習者自身の場合、イラストに学習者自身⁵⁾が登場している「鳥の視点」・「神の視点」にイラストを使用した会話練習では、学習者から「わたしは山田さんに本をあげました。」「わたしは山田さんに足を踏まれました。」という発話が出する可能性が高い。

これは、日本語は主語としての「私」を出現させることなく「私」自身のこと、考え、感情などを表すことができるという日本語の視点から見ると、このような文は小林（2001）が述べている骨格だけの不自然な日本語になってしまうのではないだろうか。

また、このような受身ややりもらいの場合こそ、「虫の視点」・「蛇の視点」でのイラストを使用した方が文法事項の習得にも効果的なのではないだろうか。わざわざ、発話者がイラスト内の「私」の視点に入って行って、更にそこからもの移動を見たり、被害を感じたりするのは難しく、学習者にとって文法事項の理解以外の負担が大きいに思われる。



「みんなの日本語」



例： 自転車をとられたんです。

「はじめよう日本語初級」

図 4

5. まとめ

本研究では、初級教科書で使用されているイラストの分析を行った。初級の教科書で使用されているイラストの中に自分自身が登場したり、自分自身が登場しなかったりと「虫の視点」、「神の視点」が一冊の教材の中に混在していることが明らかになった。これは、パターンプラクティスでのキューとして使用されることを目的としているからであろうか。しかし、キューとして使用されるのであれば、「鳥の視点」「神の視点」からのイラストは必要ないだろう。

このような教科書のイラストが日本語の視点の習得を妨げている原因の一つと考えられるのではないと思われる。日本語の視点について考慮されていない教科書での日本語学習では日本語文法に不可欠な日本語の視点を習得することが困難で、日本語の視点を理解しないまま、文法項目のみを理解しがちである。また、実際の日本語の視点である「蛇の視点」・「虫の視点」ではなく、「神の視点」・「鳥の視点」でのイラストで文型練習をすることにより、発話での「私」の過剰な使用や自然な日本語とは言えない「私は頭が痛いです」といった文を生み出す原因となるのではないだろうか。視点人物である「私」がイラストに書かれていることにより実際の発話を行う人物の性とイラストに描かれている人物の性が違う場合もあるので、イラストで描かれている視点人物が発話者なのかその場面に見えている人物なのかすぐに理解できない場合もある。

日本語の視点については様々な研究がされているが、それらの研究が日本語教育の現場では十分に反映されているとはいえない。日本語の視点である「虫の視点」・「蛇の視点」で統一されたイラストが初級教材の中に使用されることが、学習者がより日本語らしい表現を学ぶためには不可欠なことであり、今後はそのような教材の作成が必要になってくるとと思われる。

註

* 本論文は2008年度北陸大学特別研究助成を受けている。

- 1) 「視点」とは話し手が物事を見る立場のことであり、何に注目し、どのように言語化するのかわかる事態の捉え方である。茂呂（1985）や松木（1992）は、更に「視点」を「視点人物」、「視座」、「注視点」、「見え」の4つに分類した。「視点人物」とは「誰の目から見ているのか」ということであり、視点人物が「どこから見ているか」が「視座」である。
- 2) ある文型を使用して答える練習問題のことであり、今回調査した教科書では3問から6問だった。
- 3) 例も視点を表しているイラストとして数に入れた。また、二人以上での会話練習や会話のイラストは「視点人物」がどちらか特定できないので分析対象から外した。

参考文献

- 宇津木愛子（2005）『日本語の中の「私」』創元社
 金谷武洋（2004）『英語にも主語はなかった』講談社選書メチエ
 川口義一・横溝紳一郎（2005）『日本語教育ガイドブック 下』ひつじ書房
 日本語教育学会（編）（1990）『日本語教育ハンドブック』大修館
 松木正恵（1992）『「見ること」と文法研究』『日本語学』VOL. 11, PP 57-79 明治書院
 森田良行（1998）『日本人の発想、日本語の表現』中公新書
 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房
 守屋三千代（2006）「認知言語学から見た日本語教育〈主観的把握〉の理解・運用のために」第7回認知言語学学会ワークショップ
 茂呂雄二（1985）「児童の作文と視点」『日本語学』4-12 明治書院
 横田隆志（2006）「自己紹介時における自称詞の使用状況」『多様化日語教育研究』西安交通大学出版
 横田隆志（2007）「トーク番組における一人称の表出」『日本文化論叢』大理理工大学出版

教科書

- スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』スリーエーネットワーク
 スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ本冊』スリーエーネットワーク
 TIJ東京日本語研修所（2006）『はじめよう日本語初級文法①ドリルと文法』スリーエーネットワーク
 TIJ東京日本語研修所（2006）『はじめよう日本語初級文法②ドリルと文法』スリーエーネットワーク